



一次過程的思考反応とグラフィック・ロールシャッハ法デジタル版の描画反応からみた芸術家の創造的退行のありようについて

清原，舞子

(Citation)

神戸大学発達・臨床心理学研究, 21:7-16

(Issue Date)

2022-02-28

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100476907>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476907>



一次過程的思考反応とグラフィック・ロールシャッハ法デジタル版の描画反応からみた芸術家の創造的退行のありようについて

On the Creative Regression of Artists from point of view Primary Process Response and drawing responses to the Graphic Rorschach Digital version (GRD)

清原 舞子*
Maiko KIYOHARA*

要約：本研究の目的は、①芸術家の言語表現における一次過程的思考反応(Primary Process Response：以下 PPR)を Holt の「一次過程スコアリングシステム(PRIPRO)」によって算出しその特徴を明らかにすること。②グラフィック・ロールシャッハ法デジタル版 (GRD) の描画反応から「プロットー概念間のバランスのとり方」を PPR において評定し、一次過程への退行と二次過程への進展のバランスのとり方を精細に検討し創造的退行のありようを示すことである。その結果、PPR の総反応数が全体の平均値で 8.8(SD7.41)であり、一般正常群と比較して総反応数が多いがバラつきもみられた (range : 0-24)。さらに PPR の各反応において最も多くの芸術家が示したのは「自閉的明細化 (AuEl1)」と「自己関連づけ (SR-1)」であった。また PPR と GRD の関係においては、「性的／口唇的反応内容 (L1)」のみ＜バランス優位＞の有意性がみられた $P<.05$ 。一方、＜AuEl1＞では＜バランス優位＞が有意に低く、＜概念優位＞が圧倒的に高くみられた ($P<.01$)。さらに、先行研究ではコントロールに関して一致した結果は得られてこなかったが、GRD の描画反応と PPR の言語表現を比較することで、一次過程から二次過程へのバランスのとり方をみる新たな視点となった。

キーワード：芸術家、創造的退行、グラフィック・ロールシャッハ法デジタル版、一次過程的思考

1. 問題と目的

芸術家の思考は、創造性もしくは芸術的思考であるか、あるいは混乱した病理における思考障害の表れであるのか。その区別に関しては、何世紀にもわたり哲学者や科学者を魅了してきた命題である (James,H,2010)。ロールシャッハ研究においても、創造的で知的な人は、精神病的思考活動と間違われかねないようなきわめて独創的で、念入りに作られた、珍しい反応を作り出すことを多くの研究者が示している (James,同)。筆者はこれまで、芸術家を対象にグラフィック・ロールシャッハ法デジタル版 (以下、GRD と表記) を試行し、創造的退行を中心概念とした研究を行ってきた。

創造的退行 (Creative regression) とは、Schafer(1954)が提唱した概念であり、欲求や欲望などエスを優先した非現実的・非論理的な思考プロセスである「一次過程」と、現実的・論理的で自我を優先した思考プロセスである「二次過程」との間をコントロールしながら行き来する健康的な自我機能である。特に芸術家が一次過程と二次過程を自由に行き来しながら創作過程において用いる自我の状態を指す。

芸術家の創造的退行のありようを知るためには、言語反応における一次過程への退行の様相と二次過程のバランスを調べる必要がある。一次過程を測る方法として、ローシャッハ法を用いた研究が多くなされており、Holt(1977)は「一次過程スコアリングシステム (以下、PRIPRO と表記)」を開発した。このシステムは、被検者の言語表現に含まれる一次過程の表出を査定するだけでなく、一次過程思考の適応的な利用、すなわち認知と情動のさまざまな能力を測る手段として信頼性と妥当性を備えた測定尺度である (James,H,2010)。(Table.1)

また Levine & Grassi(1942)によって開発されたグラフィック・ロールシャッハ法 (以下、GR と表記) は、通常のロールシャッハ法の質疑段階、とくに反応領域に続いて、その図版をどのようにみたのか、検査者にわかるように描画することを求めるものである。GR を施行することにより、主要なロールシャッハ・スコアについて明確化できること、F-と F+の細微な区別を可能にするなど、通常のロールシャッハ法を補うことの意義を説いている。Klopfer,B(1956)は GR を「統合失調症の現実味の障害を明確にする上で有効である」と評価している。また、田形(1987)は、

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究所, 横浜尾上クリニック

「GR は通常（言語的）のロールシャッハ状況では明確にできない反応過程（インクプロットを認知し、記憶している概念を想起して、インクプロットと統合する過程）を観察可能にする方法である」とその意義について述べている。

清原（2017）は、被検者、調査者双方の負担軽減やデータ整理の複雑さの解消、データ整理の簡便性の向上、さらに解釈に有する精度向上等を目的として、描画施行に際して ICT 機器（タブレット機器）を導入したグラフィック・ロールシャッハ（デジタル版）（以下、GRD と表記）を試みた。GRD を施行することにより、一次過程への退行と二次過程への進展のバランスのとり方を精細に検討することが可能となる。

本研究の目的は、Holt の PRIPRO から一次過程的思考を算出し、さらに GRD の反応の関連から芸術家の創造的退行のありようを明らかにすることである。

尚、本研究は第 25 回日本ロールシャッハ学会にて研究発表した内容に加筆修正したものである。

Table 1. 一次過程表象尺度(Propro) (Holt,1977)

1. 反応内容	
(1) 性愛／口唇的反応内容 (Libidinal Content)	口唇的受容、口唇的攻撃、肛門、性、露出、親淫、同性愛、その他
(2) 攻撃的反応内容 (Aggressive Content)	攻撃、攻撃の被害、攻撃の結果
2. 反応様式	
(1) 圧縮 (Condensation)	混交、感染、相互浸透、混合、恣意的統合、不適切な色彩
(2) 置き換え (Displacement)	連鎖連想、音韻連想、語呂合わせ、比喩、時間の置き換え
(3) 象徴 (Symbolization)	色彩・濃淡、イメージ、空間
(4) 矛盾 (Contradiction)	情緒、論理、現実性
(5) 言語表現 (Verbalization)	支離滅裂、圧縮、奇矯な言語表現、特異な言語表現、言い間違え
(6) その他	自閉的論理、記憶弛緩、無関係な思考の侵入、など
3. 統制と防衛	
(1) 距離 (Remoteness)	縮小、民族、動物、植物、非生物、描写、地理、距離、物語、宗教、空想、隠喩、仮定
(2) コンテキスト (Context)	文化、美的、知的、ユーモア
(3) 遅延方略 (Postponing Strategy)	遅延、ブロックング
(4) その他の防衛	反映、婉曲、粗野な言語表現、適応的修正、合理づけ、否定、最小化、不安対抗、自己非難、否認、拒否、曖昧、投影、強迫的防衛、分離、回避、不能
(5) オーバートネス (Overtness)	行動、言語、体験、潜在
(吉村,2004)	

2. PRIPRO を用いた創造的退行の測定

Holt (1977)の PRIPRO は、一次過程思考の表出を査定するための 3 つのカテゴリからなる。1 つ目のカテゴリは、一次過程的な願望の度を反映させる＜内容変数＞であり、2 つ目は反応に示された思考の形式を捉える＜形式変数＞である。これは Rapaport の思考形式の障害に関するスコアリングカテゴリである「逸脱言語表現」を修正したものである。これらのカテゴリの一次過程の体験過程が露骨で原始的である場合は「レベル 1」、社会化され受け入れやすい形で表現された場合は「レベル 2」に下分類される。そして、最後のカテゴリとして、一次過程思考の出現によって促される統制と防衛の試みを測定する＜コントロールと防衛＞がある。内容変数と形式変数のいずれかの「レベル

1」のカテゴリに該当した反応が「一次過程的思考反応(PPR: Primary Process Response)」と定義されている。(詳細は Table1 を参照) さらに、この一次過程的思考スコアと形態質評価をもとに「適応的退行スコア(ARS:Adaptive Regression Score)」を算出することができるが、本研究では、「一次過程的思考反応」と GRD との関係を検討するため、ARS の算出は行わない。

PRIPRO を用いた「芸術家の創造性」に関して、吉村 (2004) は Dudek (1968) の研究を取り上げ、「一次過程思考の量やその統合の程度が芸術的な能力の高さを予測できる」ことを言及した。また「同じ芸術家であっても、経験年数が上の者や、芸術的表現力において勝っている者に多くのプリミティブな一次過程思考を認めることができる」とも述べている。また、芸術家の表現スタイルとメンタルヘルスの関係について Ludwig,A.M. (1995) が研究を行っており、その結果「詩人や抽象画家などの漠然とした対象を取り扱うことの多い芸術家の方が、ダンスや彫刻など、明確な形に仕上げるタイプの芸術活動を生業としている者よりも精神疾患の罹患率、とりわけ精神病の罹患率や自殺率の高い」ことを見出している。この結果を踏まえて吉村 (2004) は、「漠然とした形態の芸術表現を旨とする芸術家が、より深い自我の退行に親和的である可能性は十分に考えられる」と述べている。これに対して伊藤 (2018) は、PRIPRO を用いた「具象画家と抽象画家の『自我のための退行』のありようの違いについて」の研究において、具象画家よりも抽象画家の方が、「形式面で退行し易く、特に自閉的明細化、イメージの凝縮、自己関与付け、象徴反応のカテゴリで『自我のための退行』をし易い」という結果を見出した。また「芸術家を対象としたこれまでの研究では、優れた芸術家はより多くの一次過程を出しているが、一次過程のコントロールに関しては、一致した結果がでていない。これは対象とした芸術家の種類、芸術家の評価の基準の違い等など、複雑な要因が関わっていると考えられる」とも指摘している。

3. GRD の評定法と一次過程的思考

Levine & Grassi(1945) は、GR の描画反応におけるフォームレベル(F)を①被検者の概念とプロットの特徴との適切なバランスを示す描画反応は「良好な形態 (F+)」、②被検者の概念からのみ得られた描画反応は、反応の由来であるプロットとほとんどまたはまったく関係せず「不良の形態 (F-)」、さらに③概念的な寄与のないプロットのみに基づいた描画反応は「純粋な形態(F)」を想定した。これに中間点二つを加え、プロット優位から概念優位の極までを 5 段階に分けた。さらに田形 (1987)は、この考えを参考に、プロット—概念間のバランスのとれたものを中心にして、プロットに対する忠実度によって 5 段階に分類した(Table2)。

被検者は描画反応を求められる際に、自身がプロットに見た反応（概念）を見たままに描くように教示される。その過程において田形 (1987) は、「プロットと概念のバランスの度合い、ないし妥協の度を測ることができる」と述べている。この過程は「形態水準 (F)」を明確化し、さらに一次過程的退行反応が見られた際に、プロットという現実に対するバランスの度合いから、二次過程への作用をみる事が可能となる。

さらに、PPR とこれらの GRD の 5 段階のレベルとの一般的な

関係性を考えてみると、現実（プロット）を全く無視して、自身のイメージ（概念）優位になっている＜Ⅴレベル＞は、非現実的・非論理的な一次過程的な描画反応であり退行が生じており、コントロールを欠いた状態といえる。さらに、プロット―概念間のバランスのとれた＜Ⅲレベル＞は、形態水準の保たれた良好な描画反応であるため、PPRのみられた反応においてⅢレベルが生じた場合は、適応的退行、すなわち「創造的退行」が生じているといえる。＜Ⅰレベル＞は、現実（プロット）と概念のバランスを欠いている。これは、被検者がプロットに固執し過ぎた固い描画反応であり、PPRのみられた反応に対して生じた場合はコントロールを欠いているとみることができる。しかしこれらは、一般的に考えられることであり、実際にはGRDの描画反応を精査する必要がある。

Table 2. GRD 5段階の評定法

Ⅰレベル	プロットに固執し、本質的にはプロットの模写である描画
Ⅱレベル	Ⅰレベル程強くはないがプロット優位の描画
Ⅲレベル	プロットと概念のバランスのとれた描画
Ⅳレベル	Ⅴレベルほど強くはないが概念優位の描画
Ⅴレベル	プロットとの一致がまったく認められず被検者のイメージだけで構成された描画

(田形,1987)

3. ICT 導入の試み

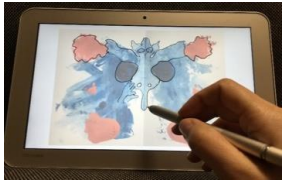
ICT(Information and Communication Technology)とは、通信技術を活用したコミュニケーションを指す。スマートフォンやタブレットなど、インターネットにおける通信技術の普及に際して、電子化された大量の質的情報が入手可能となっている。研究においても、とくに人を対象とする人間科学の分野では、事例研究やインタビュー分析など、多量な数値化できないデータの分析が今後ますます必要となってくる(佐藤,2018)。本研究ではQDAとGRDを用いたICTの導入を試みた。それぞれの手法について簡単に触れる。

QDA(Qualitative Data Analysis)とは、インタビューの内容を書き起こした記録（テープ起こし）あるいは新聞の記事のような文字テキスト情報を文書型データベースとして体系的に整理し、分析していくために開発されたコンピューター・プログラムであ

り、欧米ではすでに20年以上も前から主要大学や研究機関において広く使用されている。2005年以降、日本語の処理が可能となり日本においても徐々に導入されているが、欧米等に比較するときわめて低いレベルにとどまっている(佐藤,2008)。従来、質的データの分析は「カード方式」のような紙を使って行われてきた。カード方式では記事や記録をコピーして切ったり貼ったりといった作業やそれらの管理、グループでの共同作業の際の手間、さらに原文脈の参照の困難さなどアナログによる膨大な作業を有した。QDAソフトの導入により、これらの問題点をICT化することで解決する手立てとなる。本研究では代表的なQDAソフトであるMAXQDAを使用している。Holtの一次過程スコアリングは、40以上の下位スコアに分類するため、スコアリングの作業は困難なことが問題としてあげられているが、MAXQDAの「コーディングシステム」を使用して電子化することにより、スコアリング或いはその後の分析において画期的に効率化できる。

次にGRDについて述べる。Levine & Grassi(1942)が開発したグラフィック・ロールシャッハ法(以下、GRと表記)の施行において、従来法では図版の上に重ねたトレーシング・ペーパーに描画するが、GRDでは、ICT機器(タブレット機器)を用いてタブレット上で描画を行う。使用するソフトはWindowsアプリである「Sketchable」である。このソフトの特徴は、タブレットとデジタルペンを使って、一枚の絵に対してレイヤーを何枚も重ねることができる。さらに、一冊のスケッチブックのようにページを増やして保存できるため、被検者が描画した10枚のロールシャッハ図版を1図版の全反応について描画反応をレイヤー分けして1ページに収め、それを一冊にまとめて保存することができる

Table 4. GRD 操作手順とデータイメージ

①タブレット機器に10枚のRor.図版を読み込み、図版ごとに図版レイヤーを作成し、透過度を調整する

②レイヤーを重ねて、描画レイヤーを作る

③自由反応段階の後、デジタルペンを使用して反応を描画

④別のレイヤーで、次の反応を描画する

⑤反応を描画し終えたら、次の図版に切り替える

※同作業を10枚の図版に対して行う

GRD データイメージ

●1人の被検者毎に1冊の本のように保存できる

●1ページの中に、1枚の図版の全反応がレイヤー分けして保存されている

●各ページに図版毎に保存

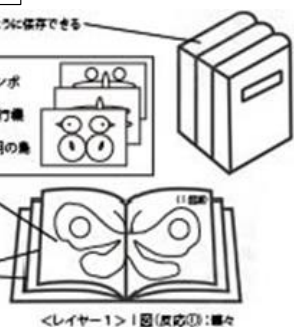
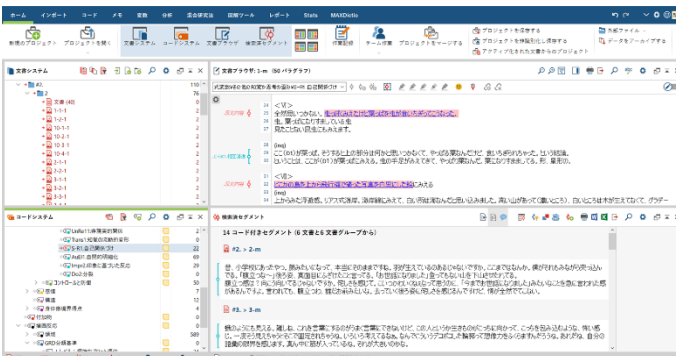


Table 3. MAXQDA 操作画面



(Tab4.参照)。従来法では、一枚ずつトレーシング・ペーパーを用いて描画していたため、紙のデータが多量となり、検査者側の負担も大きかったが、GR をデジタル化したことによりデータの扱いが格段に楽になり、さらに、分析においても QDA ソフトにて一括管理して言語反応と同時に比較分析したり、共同研究する際に、同時にコーディングしたりできるなど、その可能性が大きく広がった。

4. 研究目的と方法

本研究の目的は、①芸術家の言語表現における一次過程的思考反応(PPR)を PRIPRO によって算出し、その特徴を明らかにする。②PRIPRO によって算出された PPR と、GRD の描画反応から「プロット―概念間のバランスのとり方」を評定し、一次過程への退行と二次過程への進展のバランスのとり方を精細に検討し、創造的退行のありようを示すことである。

研究対象は、創造活動を専門に行っている芸術家 26 名（身体表現家 10 名、画家 9 名、音楽家 7 名）（平均年齢：35 歳、SD:8）国内外で個展や公演活動を行うなど 10 年以上のキャリアをもって創造活動を行う芸術家である。なお、対象者には精神疾患の既往歴がないことを調査前に確認した。

研究手順は、通常のロールシャッハ法（片口法）を施行し、質疑段階、とくに反応領域に続いて、その反応がどう見えたのか、主な反応に対して被検者自身に描画してもらう。言語反応を PRIPRO (Holt,1970)によってスコアリングし、さらに描画反応を 5 段階の評定法（田形,1987）によって分類する。

分析の手順を以下に記す。

- ① 高橋（1981）の一般成人群および精神病群の平均値と芸術家群の平均値で一標本 t-test を行う。
- ② PPR の反応数を示し、反応数の平均値について一要因の分散分析、さらに反応がなかった者と、1 つ以上の者に分けて芸術家の専門別（音楽家群、画家群、身体表現群）の 3 群間で χ^2 -test を行う。
- ③ GRD の描画反応を「プロット優位（Ⅰ・Ⅱ）」、「バランス（Ⅲ）」、「概念優位（Ⅳ・Ⅴ）」と芸術家の専門別で χ^2 -test を行う
- ④ PPR の主な反応と GRD の評定の比較するため、PPR の各反応と GRD の 3 水準との間で χ^2 -test を行う。

5. 結果

5.1 芸術家群の一般カテゴリ

芸術家の全反応を片口法によってスコアリングし、高橋（1981）の一般成人群および精神病群の平均値と芸術家群の平均値で EAZY R を用いて一標本 t-test を行った結果を示す（Table5）。

本研究の芸術家群は、一般成人群と比べて、全体反応も異常部分反応（Dd%:13.6）も多い【W-Dd 型】、形態水準の低さ（F+%:49.6）、濃淡反応（Σc）と色彩反応（Sum C）＜情緒・感受性反応＞の多さ（4.9）、反応内容として内臓反応の高さ（At%:5.9）が特徴としてあげられる。

Table 5. ロールシャッハ法一般カテゴリ（片口法）

No.	専門	R	P	W%	D%	Dd%	S%	F+%	Σc	ΣM	ΣC	M	SumC	C'	H%	A%	At%
1	音楽	21	4	61.9	33.3	4.8	0.0	100.0	6	1	5	0	5	0	4.3	60.9	8.7
2	音楽	61	2	37.7	37.7	23.0	1.6	10.8	10	8	4	6	3	1	11.7	20.0	5.0
3	音楽	48	3	64.6	27.1	8.3	0.0	60.0	2	4	18	4	19.5	3	10.4	25.0	8.3
4	音楽	44	4	59.1	29.5	0.0	0.0	75.0	13	5	6	2	3.5	1	18.2	36.4	4.5
5	音楽	37	4	32.4	29.7	35.1	2.7	31.6	3	11	3	2	2.5	1	2.7	64.9	2.7
6	音楽	33	4	51.5	45.5	0.0	3.0	40.0	9	2	5	2	5.5	17.1	14.6	2.4	0.0
7	音楽	33	2	72.7	24.2	3.0	0.0	61.5	3	2	14	2	10.5	0	17.6	20.6	2.9
8	絵画	34	2	61.8	17.6	11.8	8.8	26.3	6	7	2	5	1	0	20.6	47.1	11.3
9	絵画	20	4	60.0	40.0	0.0	0.0	100.0	5	6	1	3	0.5	1	19.0	19.0	0.0
10	絵画	18	3	61.1	38.9	0.0	0.0	75.0	1	2	2	1	2.5	0	11.1	66.7	5.6
11	絵画	22	6	77.3	18.2	0.0	4.5	57.1	5	5	3	2	2.5	0	20.0	32.0	0.0
12	絵画	42	3	42.9	16.7	31.0	9.5	35.0	10	9	2	5	1	1	11.6	32.6	0.0
13	絵画	16	4	31.3	18.8	50.0	0.0	70.0	0	3	3	0	3	0	12.5	75.0	6.3
14	絵画	128	2	25.0	21.9	48.4	4.7	11.3	23	24	6	15	3.5	3	19.5	57.8	2.3
15	絵画	79	5	13.9	50.6	27.8	7.6	45.7	15	8	9	4	8	1	5.0	45.0	2.5
16	絵画	17	3	58.8	35.3	5.9	0.0	75.0	4	5	4	2	4	0	11.8	33.3	11.8
17	身体表現	38	4	57.9	39.5	2.6	0.0	50.0	11	1	8	1	7	1	7.9	36.8	5.3
18	身体表現	99	3	40.4	36.4	36.4	3.0	46.2	26	18.0	9.0	11.0	6.5	3.0	17.0	18.0	7.0
19	身体表現	49	3	71.4	28.6	0.0	0.0	3.6	6	6	6	5	5.5	0	17.0	38.3	2.1
20	身体表現	38	3	28.9	47.4	13.2	10.5	26.3	4	9	6	4	5	0	21.1	26.3	5.3
21	身体表現	21	4	76.2	23.8	0.0	0.0	45.0	4	2	2	1	1	1	25.0	66.7	4.2
22	身体表現	38	3	57.9	18.4	21.1	2.6	29.4	11	4	4	0	3.5	1	2.6	36.8	18.4
23	身体表現	37	6	56.8	35.1	5.4	2.7	46.7	8	5	7	3	5.5	1	16.2	59.5	2.7
24	身体表現	33	4	51.5	45.5	3.0	0.0	56.3	8	2	8	1	6.5	1	4.8	19.0	14.3
25	身体表現	14	1	50.0	28.6	21.4	0.0	16.7	2	3	3	2	1.5	0	14.3	14.3	7.1
26	身体表現	37	5	62.2	35.1	2.7	0.0	77.8	2	2	14	2	10.5	1	2.4	53.7	4.9
Average		40.7	3.5	52.5	31.7	13.6	2.4	48.9	7.6	6.0	5.9	3.3	4.9	1.5	13.0	38.8	5.5
Normal *		31.7▽	6.6	54.3	38.4	3.5▼	3.1	82.8▲	2.8▼	8.8▲	3.6▼	4.8▲	2.9▼	0.7	16▲	38.5	0.7▼
Schizophrenic *		26.7▼	4.5	53.5	38.5	5.8▼	2.2	51.5	1.9▼	6.3	3.8▼	2.9	3.7	0.9	13.6	38.2	0.8▼
		▽△…10%水準 ▲▼…5%水準															
		(* 高橋,1981)															

5.2 芸術家群の PRIPRO スコア

次に、芸術家の言語表現の中から「PRIPRO スコアリングシステム」に添って＜内容変数＞＜形式変数＞、さらに＜コントロールと防衛＞の各カテゴリにコーディングし、反応があったかどうかのクロス表を作成し Table6 に示す。

Table 6. 芸術家群の PRIPRO スコア

Artist	<反応変数>				<形式変数>						<コントロールと防衛>				Total	GRD
	L1	AG1	Comp1	Sym1	Au1g1	S-R1	AuE11	Rm	Cx	Pd	O-					
music	#1.	0	0	1	1	0	0	1	1	0	0	0	4	3		
	#2.	1	1	1	0	0	1	1	1	0	1	1	8	2		
	#3.	0	0	1	0	0	1	1	1	1	1	0	6	3		
	#4.	0	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	4	2		
	#5.	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	1		
	#6.	1	1	0	1	0	1	1	1	1	0	0	7	3		
	#7.	1	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	5	2		
paint	#8.	1	1	0	1	0	0	1	1	1	0	0	6	3		
	#9.	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2		
	#10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
	#11	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2	3		
	#12	0	1	1	0	0	1	1	1	0	0	1	6	2		
	#13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
	#14	1	0	0	0	1	1	1	1	1	0	0	6	3		
	#15	0	1	0	0	0	1	0	1	0	1	0	4	3		
	#16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
body	#17	1	0	1	0	0	1	1	1	1	0	1	7	3		
	#18	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2		
	#19	0	1	1	1	0	1	1	0	1	0	0	6	3		
	#20	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	1		
	#21	0	0	1	1	0	0	0	1	1	0	1	5	1		
	#22	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0	1	4	3		
	#23	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	4	3		
	#24	0	1	1	0	0	1	1	1	1	0	0	6	3		
	#25	1	0	1	0	1	0	0	1	1	0	0	5	3		
	#26	0	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	3	3		
Total		7	10	10	8	2	13	14	20	9	3	6	102			

※1 PRIPRO: 0=反応なし, 1=1つ以上の反応あり
 ※2 GRD: 1=プロット優位, 2=バランス, 3=概念優位

次に、MAXQDA で「PRIPRO スコアリング」に沿ってコーディングした後、コードマトリックス・ブラウザという図解ツールを用いて作成した表を Table7 に示す。＜内容変数＞より＜形式変数＞、特に「そのほかの知覚や思考の歪み」にカテゴリされる一次過程反応が多く、また、＜コントロールと防衛＞では「遠隔」にカテゴリされる反応が多いことが視覚的に見て取れる。

Table 7. PPR のコードマトリックス

5.3 PPR と 3 群間比

また、PPR の反応がなかった者 (0) と、1 つ以上の者 (≥ 1) に分けて芸術家の専門別 (音楽家群、画家群、身体表現群) 3 群間で χ^2 -test を行った結果、画家群のみが反応を示さない人が 3 名いたため有意差がみられた。(Table8)

Table8. PPR 総反応数と有無の 3 群間比

Level1の総反応数			
	Mean	SD	range
music	11	5.61	(2-20)
paint	7.2	9.13	(0-24)
body	8.6	6.33	(1-21)
Total	8.8	7.41	(0-24)

	0	≥ 1
music (7)	0	7
paint (9)	3 ▲	6 ▼
body (10)	0	10

(▲有意に多い, ▼有意に少ない, $p < 0.05$)

さらに、言語表現を「PRIPRO スコアリングシステム」によってコーディングし、1 つ以上の PPR 反応を示したものの人数を芸術家の専門別 (音楽家、画家、身体表現) の 3 群間で χ^2 -test 比較すると、<形式変数>の「圧縮」と<コントロールと防衛>の「遠隔」において、画家群にそれぞれ 5% で有意差がみられた。また、有意差は認められなかったものの Cramer' V によって効果量を求めたところ、各項目ともに 0.1 以上であったため、より多くの被検者で同様の実験をした場合には、芸術の専門分野における違いがより明確にみられるかもしれない。(Table9)

Table 9. PPR の代表的スコアの 3 群間比較

	内容変数			
	リビドーの反応内容		攻撃の反応内容	
	L1		AG1	
	>1	0	>1	0
music (7)	3	4	3	4
paint (9)	2	7	4	5
body (10)	2	8	3	7
Cramer's V	0.219		0.138	

	形式変数									
	圧縮		象徴反応		その他の知覚や思考の歪み					
	Comp1		Sym1		Aut1		S-R1		AuE1	
	>1	0	>1	0	>1	0	>1	0	>1	0
music (7)	3	4	3	4	0	7	5	2	6	1
paint (9)	1▽	8▲	1	8	1	8	3	6	4	5
body (10)	6▽	4▲	4	6	1	9	5	5	4	6
Cramer's V	0.432		0.311		0.176		0.296		0.39	

	距離		コンテンツ		その他の防衛		明白性	
	Rm		Cx		Neg		O-	
	>1	0	>1	0	>1	0	>1	0
music (7)	7	0	2	5	1	6	1	6
paint (9)	4▽	5▲	2	7	1	8	2	7
body (10)	9	1	5	5	0	10	3	7
Cramer's V	0.569		0.261		0.233		0.149	

(▲有意に多い,▽有意に少ない,pc.05)

効果量(effect size)とは、「効果の大きさ」であり、サンプルサイズによって変化することのない標準化された指標である。

(Table10)

Table 10. 効果量の指標

検定 (分析)	効果量の指標	効果量の目安			連関係数である
		Small	Medium	Large	
χ^2 検定 (2×2以外)	Cramer's V	0.1	0.3	0.5	

5.4 芸術家群の GRD と PPR

最後に、芸術家群の GRD の及び、PPR との関連と結果を示す。本研究の芸術家群の GRD (全 557 枚) の 5 段階の分類結果を (Table11) に示す。

Table 11. 芸術家群の GRD の 5 段階分類

Artist	No.	I	II	III	IV	V	total	I %	II %	III %	IV %	V %
Music	1	0	3	1	10	1	15	0%	20%	7%	67%	7%
	2	0	6	17	15	0	38	0%	16%	45%	39%	0%
	3	0	0	7	6	7	20	0%	0%	35%	30%	35%
	4	1	3	12	8	2	26	4%	12%	46%	31%	8%
	5	5	7	8	3	0	23	22%	30%	35%	13%	0%
	6	0	0	0	3	21	24	0%	0%	0%	13%	88%
	7	0	2	9	8	0	19	0%	11%	47%	42%	0%
Paint	8	0	2	9	12	1	24	0%	8%	38%	50%	4%
	9	1	3	5	1	0	10	10%	30%	50%	10%	0%
	10	0	1	7	4	1	13	0%	8%	54%	31%	8%
	11	0	1	9	2	7	19	0%	5%	47%	11%	37%
	12	0	2	10	3	7	22	0%	9%	45%	14%	32%
	13	0	0	4	2	6	12	0%	0%	33%	17%	50%
	14	0	1	12	10	21	44	0%	2%	27%	23%	48%
	15	0	12	10	12	11	45	0%	27%	22%	27%	24%
Body	16	0	3	6	2	0	11	0%	27%	55%	18%	0%
	17	0	3	1	4	0	8	0%	38%	13%	50%	0%
	18	0	5	19	11	6	41	0%	12%	46%	27%	15%
	19	0	0	0	2	14	16	0%	0%	0%	13%	88%
	20	0	7	4	6	0	17	0%	41%	24%	35%	0%
	21	10	2	0	3	2	17	59%	12%	0%	18%	12%
	22	0	2	4	4	7	17	0%	12%	24%	24%	41%
	23	3	0	5	7	0	15	20%	0%	33%	47%	0%
	24	0	2	4	8	9	23	0%	9%	17%	35%	39%
	25	0	0	1	2	7	10	0%	0%	10%	20%	70%
	26	0	1	11	4	12	28	0%	4%	39%	14%	43%
total	20	68	175	152	142	557						
%	4	12	31	27	25	100	4%	12%	31%	27%	25%	

GRD の 5 段階を、<プロット優位 (I, II レベル)>、<バランス優位 (III レベル)>、<概念優位 (IV, V レベル)> の 3 水準にして、芸術家の 3 群で比較すると (Table12)、画家群では<プロット優位>がみられず、音楽家群も同様に 1 名 (17%) しかみられなかった。また、音楽家群と画家群では<バランス優位>、<概念優位>がほぼ同じ割合であったのに比べて、身体表現群では、<バランス群>が 1 名 (10%) のみであり、70% が<概念優位>となった。

Table 12. GRD の優位水準と芸術家の 3 群比

	プロット優位 (I・II)	バランス (III)	概念優位 (IV・V)	total
music(7)	1 (14%)	3 (43%)	3 (43%)	7
paint (9)	0	4 (45%)	5 (56%)	9
body (10)	2 (20%)	1 (10%)	7 (70%)	10
total	3 ▼	8	15 ▲	26

▲▼... $p < 0.05$

続いて PPR の各反応が示した GRD の 3 水準を示す (Table13)。全体として<概念優位>が多いが<バランス優位>の反応も一定数あり、「自閉的明細化 (AuE1)」は<概念優位>が多いが、他の PPR 反応では、バランスと概念が同程度あるのが特徴的である。

Table 13. GRD の優位水準と PPR の各反応

PRIPRO	1(プロット)	2 (バランス)	3 (概念)	total
L1	2 ▼	11 ▲	14 ▲	27
AG1	1	4	6	11
Comp1	5	8	9	22
Sym1	1	6	4	11
S-R1	2	7	10	19
AuEl1	3 ▼	7 ▼	23 △	33
total	14 ▼	43 △	66 △	123

▲▼... $p<.05$ 、△▽... $p<.01$

本研究の芸術家(26 名) の GRD の 3 水準は<プロット優位=3 名、バランス= 8 名、概念優位=15>であった(Tab11)。本研究の芸術家群の示した PPR の各反応に対する GRD の描画反応の 3 水準<プロット優位、バランス優位、概念優位>の分布を(Tab12)にまとめた。さらに PPR の各反応が 1 つ以上あったかどうかとの関連を χ^2 -test で比較したところ、S-R1 (自己関連づけ)、AuEl1 (自閉的明細化) で<概念優位>と<プロット優位>の間で有意差がみられた。(Table14)

Table 14. PPR の各反応を示した人数と 3 水準の優位性

L1 (7)	1(プロット)	2 (バランス)	3 (概念)	total
L1 (≤ 1)	0	3	4	7
L1 (=0)	3	5	11	19
total	3	8	15	26

Cramer's V = 0.245

AG1(10)	1(プロット)	2 (バランス)	3 (概念)	total
AG1(≤ 1)	0	3	7	10
AG1 (=0)	3	5	8	16
total	3	8	15	26

Cramer's V = 0.298

Comp1(10)	1(プロット)	2 (バランス)	3 (概念)	total
Comp1 (≤ 1)	2	2	6	10
Comp1 (=0)	1	6	9	16
total	3	8	15	26

Cramer's V = 0.251

Sym1 (8)	1(プロット)	2 (バランス)	3 (概念)	total
Sym1 (≤ 1)	1	1	6	8
Sym1 (=0)	2	7	9	18
total	3	8	15	26

Cramer's V = 0.286

S-R1(13)	1(プロット)	2 (バランス)	3 (概念)	total
S-R1 (≤ 1)	0	4	9	13
S-R1 (=0)	3	4	6	13
total	3	8	15	26

Cramer's V = 0.372

AuEl1(14)	1(プロット)	2 (バランス)	3 (概念)	total
AuEl1 (≤ 1)	0	4	10	14
AuEl1 (=0)	3	4	5	12
total	3	8	15	26

Cramer's V = 0.418

6. 考察

6.1 ロールシャッハのスコア (形態水準) にみる創造的退行

本研究の芸術家 (26 名) 全反応を片口法によってスコアリングした結果から、正常成人群に比べて、①全体反応も異常部分反応 (Dd%:13.6) も多い【W-Dd 型】、②形態水準 (F) の低さ (F+%:49.6)、③濃淡反応 (Σc) と色彩反応 (Sum C) <情緒・感受性反応>の多さ(4.9)、④反応内容として内臓反応の高さ(At%:5.9) 特徴としてみられた。一般カテゴリに関する詳細な考察は、清原 (2017) に記述しているので、ここでは本研究に関連する形態水準に関して考察する。

形態水準 (formal level) の評価に関して、「臨床的診断の上に大きな意義を持つことは、すべての研究者の認めているところである」と片口 (1974) は述べており、ロールシャッハ法の解釈において最も重要とされる指標の一つであるといえる。しかしまた、「形態水準の評価の方法は、多様であり研究者間に必ずしも一致をみしていないが、「多くの研究者が一致してとりあげているのは、反応としてあたえられた概念とプロットの一致という意味での反応の正確さである」と片口 (同) は述べている。評定尺度においても研究者によって様々であるが、本研究では片口法に準拠しているため、反応の内容 (概念) とプロットの一致度 (正確さ) によって「+、±、〒、-」の 4 段階によって評価している。

F+%の高さは自己統制力や、情緒が安定していて、衝動性の少なさを示すといわれている。本研究の芸術家は、F+%が正常群 82.6 に対して、芸術家群全体平均で 48.9 と低く、身体表現群は 39.8 とさらに低かった。Piotrowski(1957)は、「高い F+%を示す者は、行動に一貫性があり、行動を予測することが可能であるが、これに対して低い F+%を示す者の行動様式はむら気で予測できない」と述べている。また高橋は (1981) 「F+%が高い被検者は自己統制力を十分に有しており、よく判断してから適切に行動し、情緒が安定していて衝動的になることが少ない」と指摘している。すなわち F+%の低さは、行動の一貫性のなさ、予測不能な行動、情緒の不安定さと衝動性の強さを示すことになる。これを馬場 (1981) の定義する創造的退行の観点で捉えると、創造的思考とは、自我が欲動や感情に支配された、欲動優先の心理状態である一次過程に寄った状態において感覚や感受性が豊かになり、常識にしばられない発想や直観力などが自由に発揮される状態になる。現実には固執していたら、創造性は生まれてこないと考えられ、通常予測できない行動をとることも、また創造性のあり方と捉えることができる。また馬場 (1981) は、創造活動に伴う退行における、退行の深さの違いをあげている。自我の退行の仕方、すなわち退行の水準の違いによって、欲動の性質や感覚の激しさなどが異なり、より退行が深く、その振幅が大きくなるほど、個性的、独創的な創作に結びつくと述べている。

形態水準の評価である「反応の内容 (概念) とプロットの一致度」や、言語表現だけではわからない被検者の現実感覚について本研究の GRD の描画反応を施行することでより子細で視覚的に把握することができる。

6.2 芸術家の一次過程的思考反応 (PPR) の特徴

芸術家を対象に Holt の PRIPRO スコアリングシステムを用い

た先行研究では、上述したように一次過程的思考反応の量は成功した芸術家が、成功していない芸術家・一般群と比較して有意に高いことが示されている (Dudek,1968、伊藤,2018 など)。また伊藤(同)の美術専攻大学院生と一般大学院生を比較した研究では、「美術専攻大学院の特徴として、＜内容変数＞において性的衝動(L1)への退行が著しく、＜形式変数＞では画家としての物の見方に関わるカテゴリ (Sym1、C1、S-R1) での退行の多さが特徴的であった」と述べている。

本研究の芸術家群の PPR の特徴としては、PPR の総反応数が全体の平均値で 8.8(SD7.41) (Tab8) であった。一般成人群の PPR の反応数は 0 か 1 なので (伊藤,1993)、総反応数は多いと言える。しかし range(0-24) とバラつきも大きかった。さらに、PPR の各反応において 1 つ以上の反応を示した人数で比較すると (Tab9)、最も多くの人が反応を示したのは、＜形式変数＞の「自閉的明細化 (AuEl1)」(14 名)と「自己関連づけ (SR-1)」(13 名)であり、次いで「圧縮(Comp1)」と＜反応変数＞の「攻撃的衝動 (AG1)」(10 名)が同数にみられた。以下、その特徴を芸術家の反応例と共にみていく。

まず＜反応変数＞より多くを示した＜形式変数＞とは、Rapaport が一次過程の反応の形式的な表出をまとめた「逸脱言語表現」をベースとしており、「二次過程的思考を特徴づけるような現実世界の体験に基盤をもつ、論理的で秩序だった思考形式からの逸脱の度合いを測定する」(伊藤,2018)ものである。そのうち、本研究の芸術家が有意に多く示した「自閉的明細化(AuEl1)」とは、「不適切なテーマの明細化」であり「作話反応(Confabulation)」に相当する。芸術家の場合は「芸術家独自のものの見方や世界観が反映された非現実的で一般の人には伝わらない明細化」(伊藤,2018)である。本研究で 26 名中 14 名(54%)(range0-9)にみられ、最も多くの反応が見られた。AuEl1 にスコアされる言語表現は、1 つの反応が長く止めどなくイメージが溢れていくような観念放逸を思わせるような反応を示すことが多かった。例えばスコアされた反応として、「もうちょつと丸っこいネズミの仲間、哺乳類だね。でも、肉食じゃなくて草食なんだけど、コロコロして可愛い。細長い。リスとは違うしな、尻尾が違う。イメージとしてはフェレットっぽいイタチ、でもイタチじゃない。あ、山ネズミロッキーチャックぽいな。で、この二人は仲よし。どっかに美味しいものはないかな。今日もいつもと同じようにもうしばらくすると美味しいものがみつかる。天気もいいし。これみてもとんとんとめどなく言えちゃうんですけど(VIII)」。

VIII図の「ネズミの仲間」は 4 つ足動物で P 反応である。しかし、その後、ネズミが生きている様子がまるで物語のように紡がれていった。このような 1 つのイメージから深く物語に入っていくような言語表現が特徴的である。伊藤(2018)が具象画家と抽象画家(各 15 名)を被検者とした先行研究では、AuEl1 を 1 つ以上の反応数を出したのが具象画家群で 2 名だったのに比べ、抽象画家群では 8 割の 12 名であり PPR の各反応の中で最も大きな差であったと報告している。さらにまた、美大生と一般大学生を比較した別の研究では差が見られなかったことから、AuEl1 は抽象画家に特徴的なスコアであるという興味深い結果を示している。本研究の芸術家は、音楽家群、画家群、身体表現家群の 3 群であるが、3 群間で有意差は見られなかった。しかし、音楽家群では AuEl1

を全く表出しなかったのは 1 名のみで、画家群と身体表現家群では半数ずつであった(Tab9)。PPR の各反応と 3 群間の関連については後述する。

次に「自己の関連づけ(SR-1)」とは、自己関与表現をスコアするものであり、極めて非現実的な種類のものである。被検者は、反応の中にある何かが自分にとって個人的な意味や関係があるのだと確信している。例えばスコアされた反応として、「なんか一所懸命生きようとしている、前向きに。体の半分が壊死しているような状態で、でもまだあきらめていない。俺か。そういう風にみえるな。すごい自分に見えるな。でも自分だとするとすごい過去の自分だね。そういう感じだったなっていう。そういう風にみるとよくここまで健康になれたなっていう感じだね(II 図)」。

被検者はプロットの中にありありと自分の姿や、自分に関連する何かをみている。Rapaport(1946)はこのような反応を、「プロットー反応間の距離」によって概念化している。すなわち、プロットの中に自分を見たり、極端に自分に引き寄せるような反応は、「プロットー反応間の距離の喪失(Loss of distance)」となる。これは、思考障害を測る指標であるが、片口(1974)は「空想力の豊かな正常成人のプロットにも生じることがある」と述べている。さらにまた、本研究の芸術家では、上記の反応例にも見られるような、主観的であるとともに、独自の世界観が広がっていくような「作話反応」すなわち「自閉的明細化」を伴うことが特徴的であった。

「圧縮(Condensation)」は一次過程的思考の代表格である。「圧縮」とは、「イメージや着想を安定しておくこと、および外的現実を正確に認知する上で必要な仕方では区切っておくことができないことを指している」(James,1999)。例えばスコアされた反応として、「余白が気になった。余白を埋めているインクのシミがパクパクしているひな鳥に見えた。このことからトイレに行きたくなった(VII 図)」これは、「圧縮」の中でも、自己と反応の境界の喪失である＜感染 C-Ctm1＞にスコアされる。その他、2 つの別々のイメージや着想が融合した＜相互浸透 C-ctgn1＞や、同じプロットの領域に同時に 2 つ以上の重なり合ったイメージを溶け込ませるような奇怪な反応を表す＜混交反応＞もこれに属する。すなわち、本来別々であったものが 1 つの反応として知覚されているような言語表現である。「混交反応」は、思考障害スコアの中で最も病理的な反応とされている。しかし James(同)は、「一次過程思考の中心的メカニズムである圧縮は、病理だけ出なく適応的機能や創造性をも反映している」と述べ、圧縮を病理的圧縮と創造的・適応的圧縮の 2 つのカテゴリに分けて考える必要性を説いている。すなわち、創造的・適応的圧縮とは、「一次過程のメカニズムが二次過程の意図によって、意味を伝えるのか、誰かを笑わすのか、製品を売るのかといった特殊な目的のために使われるもの」であり、「芸術や文学の作品で最も頻繁に生じる」と指摘している。創造的圧縮には、Rothenberg(1972,1976)が提唱した、同時に 2 つ以上の対立または矛盾したアイデアや概念やイメージを利用して考える「ヤヌスの思考 (Janusian thinking)」や「同一空間過程(Homospacial process)」、或いは、「隠喩(Metaphor)」や「だじやれと冗談(Puns and Jokes)」が定義づけられている。このことから、本研究の芸術家群が「圧縮」スコアを多く示したことは、芸術家の特性と考えられる。

さらに、＜反応変数＞の「攻撃的衝動 (AG1)」とは、攻撃的、破壊的な内容によって 3 つの下位分類からなる。①Ag1-S (中心的な役割を果たすものが) 攻撃をしている場合。②Ag1-ob 攻撃の被害を受けたり、攻撃の対象になっている場合。③Ag1-R 破壊行動の結果や攻撃の結果や余波が描写された反応、加害者と被害者の両方が含まれている場合である。芸術家群では、＜反応変数＞の「性愛／口唇の反応内容(L1)」より、AG1 の方が反応を示す人が多かった。しかし、反応総数でみると AG1 (11 個) に比べて L1 (16 個) の方が多いため、L1 を表出する人は頻回に表出しているといえる。AG1 の反応例をあげると、「なくなっちゃって、死んで、風化しかけた虫というか、穴があいて、ボロボロになっちゃった感じの虫の死骸のようにみえます。羽がちぎれちゃったりして。ところどころつながってるようにみえますね。かるうじてつながってる感じはあるんですけど、もうちょっと時間がたつとバラバラになっちゃう感じ(Ⅷ図)」といった言語反応である。ボロボロになった虫の死骸というサディスティックな様相がありありと語られている。AG1 反応は、「気持ち悪い」「怖い」といった被検者自身の身体感覚を伴う言語表現がなされることが多く、その場合＜感染 C-Ctm1＞も同時にスコアされる。

以上のような PPR が芸術家群では多くみられた。Holt はさらに、一次過程的思考からのコントロールをみるための指標として＜コントロールと防衛＞のスコアを用いている。次に、芸術家の専門別とコントロールについて考察する。

6.3 芸術家の専門別にみる PRR とコントロール

本研究で対象とした音楽家群(7名)、画家群(9名)、身体表現家群(10名)の専門別による 3 群間と PRR の各反応ではく形式変数＞の「圧縮」と＜コントロールと防衛＞の「遠隔」において、画家群にそれぞれ 5%で有意差がみられた(Tab9)。また、画家群では PPR を示さなかった人が 9 名中 3 名いたため有意差がみられた。さらにまた、画家群では反応を示さない人がいた一方で、PPR を 20 以上出した人が 2 名おりレンジが広く個人差が最も多かった。＜コントロールと防衛＞の各下位分類のうち反応のみられたカテゴリと芸術家 3 群の分布を(Tab15)に記す。

PRIPRO スコアリングシステムにおける＜コントロールと防衛＞は、＜内容変数＞や＜形式変数＞にカテゴリされる一次過程的反応(PPR)に対して付与されるものであり、「反応に含まれる素材が不適切であることに被検者が顕在的または潜在的に気づいていること」(James,1999)を示している。そのうち「遠隔(Remoteness)」について Holt は、TAT に用いられている「遠隔」「距離」の概念を引用し、「一次過程素材から距離を取り、隔たりを作ることが置き換えの適応的な過程を反映している」(James, 同)。「遠隔」スコアは 15 の下位分類からなるが、そのうち芸術家の 3 群ともにみられたのは＜遠隔－動物 (自我親和的) (R-an)＞と＜遠隔－動物 (自我違和的) (R-(an))＞、さらに＜遠隔－ファンタジー(R-fan)＞であった。R-an および R-(an)は、PPR にスコアされた反応内容のうち、主要な登場人物が人間以外の哺乳類であるか (R-an)、或いは、コウモリや鳥類を含む準哺乳類であるか(a-(an))によってスコアされる。いわゆる「動物反応(A)」であり、主人公を人間以外にすることにより、一次過程的思考を受け入れや

Table 15. ＜コントロールと防衛＞と 3 群間のスコア分布

コードシステム	身体表現群	画家群	音楽家群	合計
言語反応				0
Holt-一次過程				0
コントロールと防衛				0
遠隔Remoteness				0
R-min:最小限の距離		1	3	4
R-an:動物 (自己親和的)	4	4	4	12
R-(an):動物 (自己異質的)	4	4	6	14
R-pl:植物	1		1	2
R-ia:非生物	3	2		5
R-dep+:写	1	1	1	3
R-fic s:物語・特定のもの		2	1	3
R-fic n:物語・不特定のもの			1	1
R-rel:宗教		2	5	7
R-fan:ファンタジー	2	3	1	6
コンテクストContext				0
Cx-C:文化的	2	1		3
Cx-E:芸術	2		3	5
Cx-I:知性化	5	3	2	10
Cx-H:ユーモア	3			3
その他の防衛				0
RefI:内省		1	1	2
Neg:否定		4		4
Minz:最小化			1	1
Sel-D:自己非難			2	2
明確性:Overtness				0
O-beh:行動	2		1	3
O-vbl:言語		3	1	4
O-exp:体験	8	1		9
O-pot:潜在				0
合計	37	32	34	103

すくなるようにコントロールしている。また R-fan は、人物や内容が明らかに空想のものと分かる場合の PPR にスコアされる。反応例としては「悪夢から飛び出して闘っている人」となる。空想的な反応内容は、退行のしやすさの指標として捉えられるが (高橋,1981)、PPR のような一次過程的思考をファンタジーに置き換えることにより、受け入れやすい内容にコントロールしていると言える。画家群において、このような内容からなる「遠隔」を表出した人が有意に少なかったことを考えると、まずは、PPR を表出しなかった人が音楽群、身体表現群に比べて有意に少なかったことがあげられる。反応数で見ると(Tab12)、他の 2 群と比較して少ないため、PPR を表出した画家群の中では、「遠隔」を多く示したとも考えられる。他の 2 群に比べて画家群は反応レンジが広い(SD: 9.13) すなわち個々人の差が大きいことが考えられる。

＜コントロールと防衛＞の反応数を 3 群間でさらに比較すると、それぞれの群においてバラつきがみられる。5 つ以上示したカテゴリをみると、身体表現群ではく知性化(Cx-I)＞とく体験(O-exp)＞、音楽家群ではく動物 (自我違和的) (R-(an))＞とく宗教(R-rel)＞であり、画家群ではみられなかった。本研究では被検者数が少ないため統計的処理はできないが、身体表現群と音楽家群が示した＜コントロールと防衛＞カテゴリの特徴をみていく。

身体表現群が示した＜知性化(Cx-I)＞とは、反応例では「質感とか。メタリックな質感なのかとか。質感っていう言葉じゃないけど舞踏の人の WS を受けたときに、例えばパントマイムだったら、筋肉の動かし方を意識してすべてこういう動かし方をすると決めるって聞いたんですけど、舞踏の場合はまず人形だったら人形の材質はなにか、ブリキなのか泥なのか木なのか、っていうところから考えて作って(略)(I 図)」といった言語反応であり、これは PPR では SR-1 にスコアされ、自身にぐっと近づけた言語表現を示している。

しかし、専門的な事実や知識について言及しているため＜知性化＞によるコントロールがなされているとスコアされる。また＜体験(O-exp)＞は、反応例では「内臓。子宮とかそういう女性の内臓。これもちよっとあんまり怖くはないですけど、気持ちが悪い。真ん中の空白が気になります。色彩の何でこの色彩になっているのかっていうのが、やはりちよっと不快な感じですね。(Ⅱ図)」といった言語表現である。これは PPR では C-Ctgn1 (感染) にスコアされ、自己と反応の境界の喪失がみられ、被検者自身の感情が不安定になっている。しかし動揺がみられながらも、その感情や情緒として表現された動機を言語化することでコントロールを保っている様子が示されている。このように身体表現群が5つ以上示したカテゴリは、専門的な知識に落とし込んだり、感情の起因について言語化するといった傾向を示すものであった。筆者の先行研究(2017)では、身体表現群は音楽家群や画家群と比べて「自我境界の浸透性(Pスコア)の高さ」が特徴としてみられた。これは、表現手法として、自身の身体をダイレクトに用いて、しかも他者の身体と密接にコンタクトをとりながら創造活動を行っていくという表現手法による特性を考えると、自我境界が浸透的であることは納得のいくところである。しかしまた、一次過程的な退行過程からのコントロールにおいては、知性化や言語化を用いることで、他者と共有するという機制を多く働かせているとも考えられる。

音楽家群が示した＜動物(R-an)＞は、前述したように主人公が動物の中でも自我違和的な動物である。反応例では「蜘蛛みたいな爬虫類の虫。ここ胴体で、ここが脚、これがなんかククッと食べちゃいそう、ここら辺にあるえさを脚がパッととって、パクってこのまま、ここが口なんですけど、食べちゃいそう。胴体の中に、ここに口があって、ここ菌に見えてるんです。噛み砕くみたいな(Ⅲ図)」といった言語表現である。これは PPR としては、＜攻撃的衝動(Ag1A)＞にスコアされ、グロテスクな言語表現がみられるが、主人公を虫に置き換えることでコントロールしているといえる。また＜宗教(R-rel)＞は、宗教的人物や内容についての言語反応である。反応例では「人にも見える。向かい合って羽が生えて。たぶん男の人。アレだ、イエス・キリストみたい。(略)キリストと人の顔が交互にでてる(Ⅰ図)」といった言語表現である。同じ領域に「キリストと人の顔」が交互に出てくることで、PPR の＜相互浸透 C-ctgn1＞にもスコアされる。しかし、登場人物がキリストという宗教的人物であるため＜コントロールと防衛＞としてスコアされる。このように、音楽家群が5つ以上示したカテゴリは、いずれも登場人物の置き換えによるコントロールであった。PPR にスコアされる一次過程的思考に対して、主人公を自我違和的な動物、すなわち虫や爬虫類など、普通、あまり好まれないような動物、あるいは、逆にキリストやブッタのような世界宗教的人物に置き換えることで、自身の抱いた一次過程的思考を自分と離れた普遍的な物語として語る様式が音楽家にとって親和性があるものではないかと考えられる。

6.4 PRIPRO×GRD にみる創造的退行

PRIPRO スコアリングにおいては、一次過程的反応(PPR)が「創造的退行」となるためには、PPR がどれだけコントロールされているかが重要である(伊藤,2018)。Holt は、形態水準をコントロー

ルの指標としており、Mayman(1964)の多層尺度に従って量的評定を加えている。本研究では、GRD の「プロット—概念間のバランスのとり方」によって形態水準を3水準から評定し、PPR がどれだけコントロールされているか否かを測ることとした。

GRD の5段階を＜プロット優位(Ⅰ,Ⅱレベル)＞、＜バランス優位(Ⅲレベル)＞、＜概念優位(Ⅳ,Ⅴレベル)＞の3水準にして、それぞれ多く占めた割合によって分類すると(Tab12)、芸術家全体では、＜概念優位＞が15名で、＜プロット優位＞3名、＜バランス優位＞が8名であり、＜概念優位＞と＜プロット優位＞の間に有意差がみられた。

＜概念優位＞とは、図版のプロットを無視して自身のイメージのみで描いた描画反応である。すなわちプロット(現実)と概念のバランスのコントロールを失った状態であり、「不良の形態(F-)」となる。また、＜プロット優位＞も、プロット(現実)に固執し過ぎて、概念とのバランスを欠いているため、コントロールが働いているとはいえない。上述のように「創造的退行」には一次過程へ退行を示す PPR の出現に加え GRD では「バランス」をみせることが妥当であると考えられる。しかしまた、芸術家を対象とした先行研究(Caldwell,E,1995 など)においても優れた芸術家がより多くの PPR を示すが、コントロールに関しては必ずしも一致した結果は得られていない。

本研究における芸術家群の PPR の各反応とその反応に対する GRD (123枚)の3水準で χ^2 -testによって分析した結果(Tab13)全体的には＜プロット優位＞より＜バランス優位＞＜概念優位＞に分類された描画反応が有意に高かった($P<.01$)。また、PPR の各反応のうち、有意差がみられたのは＜性愛/口唇的反応内容(L1)＞と＜自閉的明細化(AuEl1)＞であった。＜L1＞では、＜バランス優位＞が＜概念優位＞とほぼ同数であり、＜プロット優位＞より有意($P<0.05$)に高くみられた。伊藤(2018)の研究では、「プリミティブな性的衝動を示す反応の方が形態水準が高い」という結果を示しており、L1のみ＜バランス優位＞の有意性がみられた本研究の結果とも重なる。逆に＜AuEl1＞は、＜バランス優位＞が有意に低く、＜概念優位＞が圧倒的に高くみられた($P<.01$)。この結果も特徴的である。

さらに、PPR の各反応において1つ以上の反応を示した人数と GRD の3水準の優位性によって χ^2 -test分析すると＜SR-1＞と＜AuEl1＞の反応において＜プロット優位＞の描画反応は1枚もみられず＜概念優位＞が有意な結果となった(Tab14)。

＜SR-1＞と＜AuEl1＞については、本研究の芸術家群の PPR の特徴として既述したが、従来、一次過程的思考が強く思考障害の指標とされてきた2つの PPR にスコアされた反応が＜概念優位＞すなわち、自身のイメージに強く引っ張られた描画反応を多く示したことは意味のある結果といえる。これは一般的に考えると、「不良の形態(F-)」であるため、形態水準が保たれずコントロールの失敗と捉えられる。本研究の芸術家群の一般カテゴリ(片口法)においても、一般正常成人群と比較して、形態水準の低さが特徴としてみられているが(Tab5)、芸術家群にみられる「形態水準の低さ」とはどのようなものであるか。＜SR-1＞と＜AuEl1＞にコーディングされた GRD＜概念優位＞の反応例を示しながら考察を加える(Fig1,2)。

Figure 1. <自閉的明細化(AuE1)で<概念優位>の反応例

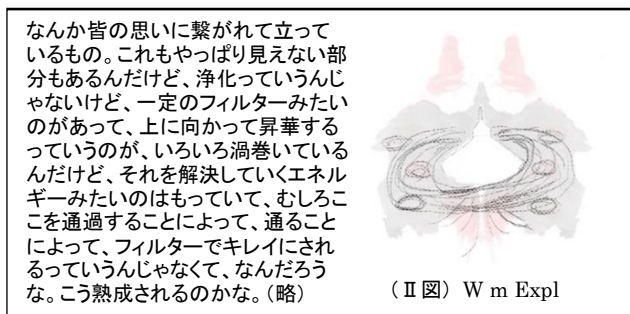
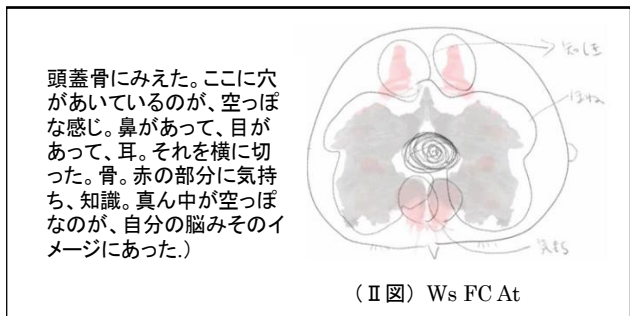


Figure 2. <自己の関連づけ(S-R1)で<概念優位>の反応例



反応内容としては、独自の視点が見られる独創反応であったり、「頭蓋骨」という P 反応ではないが比較的にみられる反応であるが、いずれの言語表現も被検者のイメージ（概念）がはっきりと断定的な表現によって示されている。それに伴う描画反応もプロットから離れた<概念優位（IV，V レベル）>にスコアされている。田形(1987)は、Schachatel のロールシャッハ法の反応過程の最終段階における「伝達」の概念を引用して、通常のロールシャッハ法が言語的に行われるのに加えて GR では、描画による「伝達」が可能であると指摘している。Fig1,2 に示した<概念優位>の反応例をみると、まさに言語反応によって述べられている独創的な反応内容が、描画によって「伝達」されているようにもみえる。

ロールシャッハ法とは、プロットを「どのように見たのか」を測る知覚検査である。本研究の芸術家群が最も多く表出した<自閉的明細化（AuE1）>では、Fig1 の例で示した独創的な物語が展開されることが多く、「どのように見たのか」を言語だけで「伝達」するのは難しく、その反応内容に圧倒されてしまい了解不能であるため「形態水準は不良(F-)」と評定される。しかし GRD の描画反応を通して被検者と検査者が一緒に追体験することで、実は、了解可能な反応であることが明らかになったり、その判断の材料となる。しかしこれは単に数値化し量的に分析できるものではないため、1 つずつ事例を検討する必要がある。

7. 結語

本研究では、芸術家の一次過程への退行と、二次過程への進展のバランスのとり方から「創造的退行」のありようを探るため、Holt の一次過程スコアリングシステムを用いて一次過程的思考反応を算出し、さらに GRD の描画反応を「プロット—概念間のバランス」から形態水準を測り、芸術家群の特徴を示した。その結果、PPR の特徴として、PPR の総反応数が全体の平均値で 8.8(SD7.41)であり、一般正常群と比較して、総反応数が多く、さ

らにバラつきがみられた (range : 0-24)。さらに、PPR の各反応において最も多くの芸術家が反応を示したのは、「自閉的明細化（AuE1）」と「自己関連づけ（SR-1）」であった。また GRD では<概念優位>が多いが<バランス優位>の反応も一定数あり、「自閉的明細化(AuE1)」は<概念優位>が多いが、他の PPR 反応では、バランスと概念が同程度あるのが特徴的であった。

8. 引用文献

- 馬場禮子(1999) 改訂 ロールシャッハ法と精神分析—継起分析入門. 岩崎学術出版
- 馬場禮子(1981) こころの管制—退行のダイナミズム. 朝日出版社
- Caldwell,E (1995) A longitudinal study of self-image and regression in aging architects of varying degrees of creativity.Dissertation abstracts international B,55(7),3007
- Dudek,S.Z.(1968) Regression and creativity ; *A Comparison of the Rorschach records of successful vs.unsuccessful painters.* Journal of nervous and mental disease Vol.147,No.6,535-546
- Holt,R.(1977). A method for assessing primary process manifestation and their control in Rorschach responses. In Rickers-Ovsiankina, M. A. (Ed.). *Rorschach Psychology* 2nd ed. New York: John Wiley & Sons Inc., pp. 375-420.
- 伊藤俊樹 (2018) 臨床心理学で読み解く芸術家の創作～ロールシャッハ法およびなぐり描き (Mess Painting) 法を通して～. 創元社
- James H.Kleiger (1999) Disorderd thinking and the Rorschach-theory,research.and differential diagnosis.Taylor & Francis Group LLC. 馬場禮子・吉村聡・小嶋嘉子ほか (訳) (2010). 思考活動の障害とロールシャッハ法—理論・研究・鑑別診断の実際.. 創元社
- 清原舞子(2017)創造的退行のありようについて.東洋英和女学院大学大学院紀要,13
- Klopfer, B.(1956) Developments in Rorschach tenique II .N.Y.World Book.
- Levin,K.N.& Grassi,J.R.(1942) The relation between blot and concept in Graphic Rorschach Responses. *Rorschach Research Exchange*.6,71-73
- Ludwig,A.M.(1995) The price of greatness.New YorkThe Guilford Press.
- 佐藤郁哉(2018) 実践 質的データ分析入門. .新曜社
- Schafer, R. (1958). Regression in the service of the ego: The Relevance of a psychoanalytic concept for personality assessment. In Lindzey, S. G. (Ed.). *Assessment of Human Motive*. New York: Rinehart.
- 田形修一 (1987) グラフィック・ロールシャッハ・テストの類型化に関する一研究 —小学生・大学生を対象として.中京大学文学部紀要,21(2),201-218
- 高橋雅春・北村依子 (1981) ロールシャッハ・テスト診断法Ⅰ.サイエンス社
- 吉村聡 (2004). ロールシャッハ・テストにおける適応的退行と創造性. 風間書房